

研究課題	ICT を活用した外国語教育と情報モラル教育の融合「共生するための架け橋」
副題	～テレビ会議を通じ、異文化を学びグローバルな視野を育てる～
キーワード	アクティブラーニング、ICT 活用
学校/団体 名	大阪府私立香ヶ丘リベルテ高等学校
所在地	〒590-0012 大阪府堺市堺区浅香山町1丁2番20号
ホームページ	http://www.liberte.ed.jp/

1. 研究の背景

本校に通学する生徒の多くは小中学校時代に学習を怠ってしまったケースが多い。美容師、ネイリスト、保育士などの分野を授業で学べるシステムにより学習や進学意欲を向上させている。しかし設備等に予算がかかり、ICT 環境が整えられず、学校には iPad20 台だけが使用できる状態である。コンピュータ教室は大型提示装置がなく平成 30 年度に実践したテレビ会議交流は通常サイズのディスプレイで行った。情報科による授業内の第 1 回日豪語学協働交流は生徒たちの刺激となった。本校の多くの生徒が中学時代を後悔し「学び直し」をしたいという気持ちが強く感じられた。以上のことから ICT の活用とアクティブラーニングに特化した教科融合指導の必要性を感じ、本研究の実践に至った。

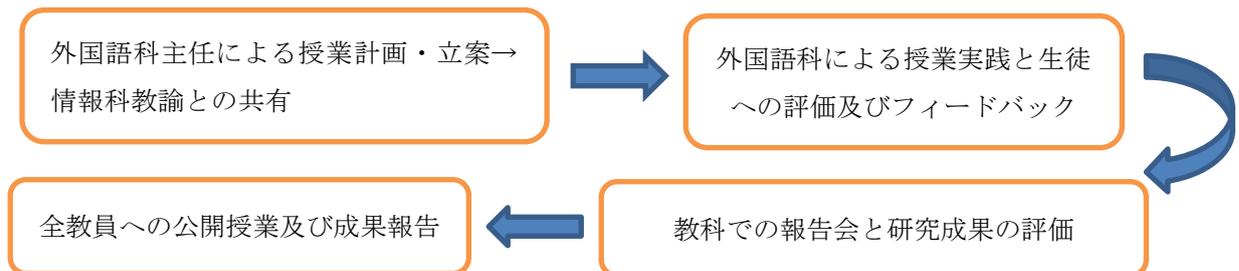
2. 研究の目的

多くの生徒たちの英語力は、ほぼ挨拶程度しか身につけておらず、義務教育でこぼれてしまった自尊心を取り戻したいと思っていた。多くの生徒たちに自信をもたせるためにはどうすればよいのかを教員チームで考え 4 技能ではなく「聴く」・「話す」という観点（2 技能特化型）での外国語教育を目指すことにした。2 技能習得において ICT の活用は必須であり、テレビ会議を通じてリアルな会話を実践学習させ、生徒自らの語学学習の意欲を向上させることを目的とした。

3. 研究の経過

本研究の推進にあたっては外国語科と情報科のもと年間計画の作成、授業実践と助成を活用しての研究成果の取りまとめを行った。その上で校長・教頭（管理職）の助言をもらいました4月4日に研究推進委員を立ち上げ、同月19日に全教員に年間計画とタブレットの活用の校内研修を行った。また外国語科会議を使つての ICT 教育指針、テレビ会議用英会話の授業計画及び評価についての経過と報告を義務付けた。< 図 1 >外国語科の教員役割・< 表 1 >授業研究抜粋参照

<図 1 >



<表 1>

① 時期	② 取り組み内容	③ 評価のための記録
5月9日(木)	テレビ会議を通じての語学協働学習 → ※代表的な実践例(1) 高校1年生対象 ① 英会話学習 ② 学校紹介(全般) ③ 情報科・外国語科教員のチームティーチング ④ クラス単位での発表	・会話表現記録 ・写真、動画の記録 ・授業実践のシラバス ・2技能(聴く・話す) の評価シート
9月27日(金)	テレビ会議を通じての語学協働学習 → ※代表的な実践例(2) 高校2年生対象 ① 英会話学習 ② 自己紹介と大阪(堺について) ③ 情報科・外国語科教員のチームティーチング ④ 外国語科教員と生徒のフィードバック	・会話表現記録 ・写真、動画の記録 ・授業実践のシラバス ・2技能(聴く・話す) の評価シート
1月22日(水)	ルーブリック評価法に基づいた語学学習プレゼン → ※代表的な実践例(3,4) 高校1年生対象 ① プレゼン英語学習 ② 資料作成 ③ 生徒同士による協働ワーク ④ ルーブリック評価によるアクティブラーニング テスト	・プレゼンシートの記録 ・動画の記録 ・生徒による資料作成 ・ルーブリック評価シートによる点数化
2月14日(金)	ルーブリック評価法に基づいた語学学習プレゼン → ※代表的な実践例(3,4) 高校2年生対象 ① プレゼン英語学習 ② 資料作成 ③ 生徒同士による協働ワーク ④ ルーブリック評価によるアクティブラーニング テスト	・プレゼンシートの記録 ・動画の記録 ・生徒による資料作成 ・ルーブリック評価シートによる点数化
2月18日(木)	<外国語科による公開授業> → ※代表的な実践例(3,4)における教員間評価 ① 授業後の講評会・成果報告書の作成 ② 研究のまとめ及び全教員への報告会準備	

4. 代表的な実践

実践のつながりとしてはテレビ会議を通じて情報モラル、外国語(英語)の2技能特化型の育成を目指し、フィードバックとしてルーブリック評価を用いたアクティブラーニングを実施した。主な実践報告として、これら2つの取り組みを紹介したい。

<実践報告(1)(2)>

【 テレビ会議での英会話力向上 】

Australia Bega High Schoolの寺西先生の協力を得て年間交流を実施。生徒たちの準備としてはAI英会話学習アプリ(Terra Talk)を活用して基本的な英会話で使用されるフレーズの練習

と習得を目指した。1学期は1年生を対象にクラス対クラスでの日豪語学協働学習を行った。ポイントとしては、正しい美しい日本語の提供と異文化から学ぶ国際的態度と英語でのやりとりが挙げられる。



Apple TV と電子黒板をつなげ、Apple 社の Face Time を活用して会議を実施。情報モラルの授業を経てジェスチャーや振る舞いにも注意し授業を行った。



【生徒の変化】

5月と9月では生徒の様子にはっきりとした違いがあった。

外国語（英語）を苦手とする生徒の特徴としては、自信がないこと

を理由に最初からあきらめる、受け身になり自分から ICT 機器を使用して実践するといった活動が乏しく、参加型の授業ができなかったという点が挙げられる。教員のフォローや AI アプリを使用しての英会話レッスンでやる気を引き上げた。主体的にできる生徒は意欲的でありどんどん吸収し他の生徒との協調も生まれた。

タブレットを用いてのデモンストレーション

【2技能評価による生徒の活動と課題】

本校生徒の特徴として「聴く・話す」ということへの抵抗は少ない。この特徴を利用して「失敗から学ぶ」という位置づけで教員側はレクチャーを行った。日常会話の英語を音で何回も聞かせ、学び直し（中学で習う文法）を授業で行い[本助成で購入した Winpass 1,2 を使用]、最終的に自分の言葉で表現させた。この一連を大切に語学習得の継続が可能となった。



＜2技能評価チェックテスト＞
外国語科教員による各々の生徒の上達度を見る。基本的には担当外教員の評価を取り入れ、生徒たちにそれぞれのフォローアップを行う。

＜生徒たちのインプット及びアウトプット＞

タブレットに自分の発音を録音→AI アプリでの発音チェック→再度自分の発音を聞く
→教員による2技能評価



＜実践報告(3),(4)＞

【テレビ会議を受けての2技能向上と協働学習の意義】

前述したように、全員ではないものの、テレビ会議を通じて一定の成長を見せた生徒達であつ

たが、さらなる飛躍を目指して、以下のような取り組みを行った。タブレット型端末を使い、有益な情報を得ること、また、外国語教育における2技能「聴く」「話す」に特化したアクティブラーニングの取り組みである。そういったことを評価する方法として、この取り組みに対してはルーブリック評価法を採用した。具体的な評価基準に関しては、後の写真をご覧いただきたい。この取り組みに対し5時間を配分し、4時間を準備、最後の1時間を発表に充てた。最初の1時間は、詳細説明とグループ決めとした。取り組みの内容は、それぞれのグループにおいて1つのテーマを決め、そのことについてタブレット型端末を使い調べ学習をさせる。そして、それをクラスにおいて英語で発表させるというものである。また、発表に際しては、視覚に訴える資料を用意することを必須とした。資料に関しては、紙媒体でもデータ媒体でも、どちらでも可とした。まず、自主的に6・7人のグループを作らせた。年度当初は、自分から積極的に話ができなかった生徒が多く、グループを決めることすら簡単にいかないことも多かったが、どのクラスも比較的スムーズに決まっていたように思う。その後のテーマ決めに関しても、各々から様々な意見が出ており、活発な議論が見受けられた。こういった活動では英語を用いることはなかったものの、間違いを気にせず自身の思ったことを積極的に発信していくことを奨励してきた成果の一端ではないかと考えている。

2～4時間目は、具体的な準備の時間となった。このプロジェクトに取り組む前に、教科書を使っての授業も行っており、その内容はApple社創設者のSteve Jobsの生い立ちからICTの発展などであった。そういったこともあり、発表のテーマはICT関連が多かった。LINEやkakaotalkなど既存のアプリの紹介であったり、空想上の多機能端末やアプリなどを考えてみたり、ICT関連環境の日本と各国の違いを分析したりと発表の内容は様々であった。その発表内容を、タブレット型端末を使い調べていたが、この点に関しては実に器用にこなしていたように思う。自身が普段使う検索エンジンと授業内で使うタブレット型端末の検索エンジンが違うケースもあり、調べ学習当初は戸惑いも見せていたが、さすがに順応性が高く、次第に慣れていった様子であった。また、全ての内容を英文で説明しなければならなかったわけだが、本格的に英作文に取り組む良い機会になったように思う。これもタブレット型端末を使い上手にこなしていた。最初こそ、どのようにすればいいのか分からず戸惑う生徒も多かったが、きっかけを教えると後は自分達だけである程度の英文を作れるようにはなっていたようだ。Google翻訳を使っている生徒が多かったが、どのように日本語を入力すればより良い翻訳が生まれるのかを試行錯誤の中から見つけ出していた。この後「話す」ことに対する準備を進めていくことになるが、ここで生徒達の評価が分かれることになる。伝われば良いとしか考えていなかった生徒がどうしても多くなってしまう一方で、より伝わりやすい「話し方」とはどうあるべきだろうと考えて努力する生徒も少なからずいたことは、この取り組みにおける大きな1つの成果だと考えられる。そういった生徒達は、発音やスピードに気を配り、タブレット型端末で正しい発音を聞くなどして、当日に向けて準備をしていた。

【発表から見えた生徒の成長】

発表は、生徒達の新たな一面を見出すことのできた、とても良い時間となった。タブレット型端末を使い、情報を得ながら作成した資料は、どこのグループにも工夫が見られ、目を見張るも

のばかりであった。特にいくつかのグループでは、資料に動画を使っており、プレゼンテーションへの理解を深めるのに非常に効果的であった。こういったことから、生徒達が ICT 機器を上手く使いこなし、グローバル社会を生き抜いていく素地があることを再認識させられた。

また、2技能に特化した今回の取り組みでは、ルーブリック評価の1部に「傾聴」という枠を設け、まずは耳を一生懸命傾ける姿勢を大事にした。本校の生徒の現状として、「英語なんて話されても分からないもの」という英語に対する嫌悪感に似たようなものを持っているというのがある。耳を傾けることそのものを拒絶し、それが故になおさら理解が深まらないという負のループに入ってしまったのである。そこを打開するために「傾聴」を1つの評価のポイントとして枠に入れたのである。評価のポイントになっているわけだから、生徒達はしっかりと耳を傾けねばならない。その結果、数名の生徒から「なんとなく言うてること分かったわ!」という声が上がったのである。相互理解が必要不可欠なグローバルコミュニケーションにおいて、テクニックや知識などよりもまずは相手の話していることに耳を傾けることが大事であることに気づいてくれたようである。



1年 英語 R グループワーク 評価基準《ルーブリック評価による》					
準 則	準 則	準 則	準 則	準 則	準 則
1	全くやる気が見られず、グループ活動に関わろうとしない	プロジェクト用の資料がない、プレゼンテーションへの効果的な補綴がない	プレゼンテーションの練習をした形跡がなく、用意した文章を読み切れていない	プロジェクトの進行や質問にせず、人任せになっていた	目標を合わせず、リアクションを取らず、他のことをしている
2	グループに関わろうとしているものの、言われたことまかしているだけになっている	資料は用意されているものの、プレゼンテーションとマッチしておらず、効果的な補綴になっていない	用意した文章は読んでいるが、発音やリズムにまで気を配れていない	プロジェクトの進行や質問を気にしていない、特定の行動・実感をすることができていない	目標と目標を合わせず、リアクションもしていない
3	自分の役割に役割を担ってしまっている、周りを助けてあげようとする姿勢に足りない	資料に工夫は見られる、プレゼンテーションへの補綴にはなっているものの、準備不足は否めない	発音やリズムなどを意識しながら、英語を聴かせるという意識は感じられる	プロジェクトの進行や質問を奪わず、予定通り進めようとする姿勢は感じられる	目標が合う、もしくはリアクションを取っている
4	自分の役割をこなすことはもちろん、周りに助けを求めたり、周りを助けてあげようとする姿勢に足りない	資料に工夫が見られ、受け手の理解促進につながっている	用意した文章を暗記しておき、発音や発音なども意識しながら進んでいる	プロジェクトの進行や質問を奪わず、予定通り進めようとする姿勢は感じられる	目標を合わせながら補綴などのリアクションをする
5	周りが行かぬ、周りが行かぬ、周りが行かぬ、周りが行かぬ、周りが行かぬ	十分な工夫が凝らされた資料が用意され、受け手が満足するよう工夫されている	十分な工夫が凝らされた資料が用意され、受け手が満足するよう工夫されている	文章を暗記しているのではなく、文章や発音なども意識しながら「自分の英語」として発表できている	目標を合わせ、リアクションも取り、お互いに対して質問や意見なども交える

1つのカテゴリにつき、10点を割合
それぞれの評価に照しては1→2点、2→4点、3→6点、4→8点、5→10点とする
満点は50点
グループへの評価ではなく、あくまでも個人への評価

Class () No () Name ()

SCORE

プレゼンテーションという形を取ったために、どうしても一方通行な発表が多かった。自分で用意した紙をそのまま読み続けるという生徒が多かったが、そうではない素晴らしいプレゼンテーションを披露した生徒も散見された。前述したような、発音やイントネーションに気を配りながら、丁寧に発表する生徒。聴衆を意識し、自分の話し方を変える生徒。極めつけは、聴衆に語りかけ、質疑応答を繰り返し、笑いを引き起こすような生徒である。もちろん、質疑応答の中で出てくる英語は非常にカジュアルで、文法的には間違いだらけではあった。しかし、コミュニケーションは間違いなく成立しており、そこには我々が1年間をかけてめざしていたものが垣間見られたのである。ルーブリック評価を通じて見えてきたものもあったので、少し触れておきたい。コミュニケーションを取るのには苦手な生徒でも真面目に勉強に取り組むと、本校のペーパーテストでは高得点を取れる傾向がある。結果的に評定も『5』を取れることになるのだが、残念なことにはそういった生徒達に英語における真の実力が備わっているかは甚だ疑問ではある。大人しく真面目で、ペーパーテストに滅法強い生徒は、プレゼンテーションでは同じような点数は取れなかった。逆に、普段のペーパーテストでは欠点すれすれのところにいる生徒で、高いコミュニケーション能力を見せつけ、高得点を獲得した者もいた。ルーブリック評価を採用したことによって起こった変化であった。

5. 研究の成果

2技能特化型評価における外国語指導において顕著に生徒の特性及び得意・不得意な分野が分かった。「聴く・話す・読む・書く」上で本校の生徒たちが一番得意、苦手としている領域は何かを外国語科教員で議論し、徹底して「聴く・話す」に重点をおいた。また情報の授業を通じて効果的なタブレット活用及び電子黒板・Apple TV を使った融合授業を行い教員側の授業に対する意識を変えることができた。ICT 教育、アクティブラーニング、チームティーチングを重ねることで「読む・書く」ことへの領域にも今後触れていかなければならないことを実感した。実践研究助成の応募の原点である「学校の設備強化及び授業改革による生徒の学力向上」を目標として実践したことにより視聴覚での授業がどれほど大切であるか全教員の共通認識となった。研究推進委員である管理職からも一定の成果として評価をいただき今年の実践研究をモデルとして今後更なる ICT 教育の充実を図るよう取り組むことを要請され、結果的に全館 Wi-Fi の環境を整えていただいた。

6. 今後の課題・展望

本校の生徒へのアプローチとしてテレビ会議での語学協働学習及びループリック評価を用いたアクティブラーニング実践を柱として情報科・外国語科との新たな取り組みに挑戦した。本校生徒だけに限らずタブレットや情報機器の使い方には慣れていないものの正しい使い方や良きツールとしての使用までには至らず情報機器に依存してしまう生徒もいた。また外国語科教員の英語レクチャー、AI 翻訳機による英文解釈等、教師側から生徒に情報を与え簡単にアプローチさせたことも課題として残った。これらのことを踏まえ、正しい情報モラル、生徒ができたことへのフィードバックの継続性、ループリック評価から見えた生徒の実態を踏まえ外国語科教員の授業展開を考えていく必要がある。

7. おわりに

今回の実践研究助成を受けさせていただき各教科への ICT 教育の重要性を示すことができ、有意義な1年間であった。本校の生徒への外国語・情報教育・ICT 教育の必要性とは教科に興味・関心が薄い生徒への学力向上と情報科モラル等授業実践を重ねることである。次年度も今回の研究をベースとして教員全体で生徒の学力向上に取り組み生徒へのアクティブラーニング・ポートフォリオ評価を活用し、本研究で得た成果をより発展させていきたい。

< 参考文献 >

- ・ICTを活用した新しい学校教育（2015）著者：原田恵理子 北樹出版
- ・学習の支援と教育評価 ―理論と実践の協同―(2013) 著者：佐藤浩一 北大路書房